

## 平成28年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	教師教育における対話型模擬授業を活用したリフレクション・トレーニング手法の開発		
氏名	渡辺 貴裕	所属	教職大学院
		職名	准教授
CITI Japan 研究倫理 e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること			
<p><b>【研究成果の概要】</b> （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>大学における教師教育で従来行われてきたような模擬授業およびその検討会では、たとえリフレクション（省察）とのつながりが標榜されている場合であっても、一般的に、学習者役側がただ授業を判定して助言を与え、授業者役側が授業を改善するという図式にとどまっている。そうした改善がここでは省察と呼ばれている。しかし、こうした行為志向型の省察は、近年の教師教育研究に照らせば、浅いものでしかない。省察をより深くするには、授業過程の背後にある意味の探究が不可欠である。模擬授業検討会では、学習者達は模擬授業中の自分たちの考えや感情を伝えることができる。これは教師と学習者間での対話を生み出し、それは、意味の探究とより深い省察のために役立つ。こうしたタイプの検討会の存在を本研究で示し、それを「対話型模擬授業検討会」と名付けた。</p> <p>この対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育プログラムを教職大学院のカリキュラムデザイン・授業研究コースにおいて実践してきた。分析の結果、このタイプの検討会における会話には3つの特徴があることが明らかになった。学生が授業を学習者視点で検討できること、教師側によって置かれている暗黙的な価値が引き出されること、教師と学習者の間のギャップに基づいた探究が生み出されることである。</p> <p>このプログラムにおいて、検討会における省察サイクルは、各学生の学校での実習と結びつけられている。学生は模擬授業を行い、検討会における対話と通じて改訂し、それを学校で実践し、さらに再び大学で報告する。このプログラムを通して、学生はより深い省察サイクルの点で、また、専門的成長のための場作りの感覚で進歩を遂げていることが示された。</p> <p>こうした実践および研究は、単に模擬授業検討会の手順にのみ取り組むものではなく、教師教育での通念に取り組むものである。つまり、行為の改善から意味の探究へ、上下関係から対等な関係へ、計画と準備の強調から「作りながら考えること」へ、教師教育の発想の転換を図るものとして位置付けることができる。</p>			
<p><b>【研究成果発表方法】</b></p> <p>全国大学国語教育学会大会の課題研究発表において「仮想的な実践を通しての「実践の中の理論」の変容」として発表（2016年5月29日）、さらに同僚の岩瀬直樹氏と共に日本教師教育学会大会の自由研究発表において「リフレクションを促す対話型模擬授業検討会 ～東京学芸大学教職大学院におけるカリキュラムデザイン・授業研究演習での取り組みをもとに～」として発表を行った（2016年9月18日）。また現在、成果をまとめた論文を学会誌に投稿中である。</p>			